擬音語・擬態語辞典

浅野鶴子 編
金田一春彦 解説

ぴょんぴょん

現代日本語の中には、明瞭な意味内容・文法的機能をもつもののほかに、音・声・動作・状態・心理作用などを非意味的な音で描写するもの、いわゆる「擬音語・擬態語」がある。それらは、日本人ならだれにもわかり日常生活の中で自然に使われている。しかし、その意味や用法・法則を説明するとなるとたいへんむずかしい。本書では、具体的な例文を豊富に示して、外国人にも理解できるようにやさしく解説した。

角川小辞典——12
角川書店

角川小辞典——12

擬音語・擬態語辞典

浅野鶴子 編　金田一春彦 解説

角川書店

擬音語・擬態語辞典

著　者●浅野鶴子・金田一春彦
発行者●角川春樹
印刷者●北島義俊　東京都新宿区加賀町一の十二
製本者●若林義一　東京都板橋区舟渡三の二十の十三
発行所●角川書店　東京都千代田区富士見二の十三の三●郵便番号102
振替口座　東京三―一九五二〇八
電話03（238）八五五一（辞書編集部）
（238）八五二一（営業部）
初版・昭和五十三年四月二十日発行
五版・昭和六十年四月三十日発行
装　丁●代田　奨
製版印刷●大日本印刷　製本・若林製本
落丁本、乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-061200-0 C0581
©Printed in Japan

著者紹介

浅野鶴子●明治四十年一月東京に生る。昭和三年津田英学塾（現津田塾大）卒業。英語教育に従事。十六年文部省外郭団体日本語教育振興会研究員となる。現代語語彙調査、海外向日本語教科書の編集に従事。二十二年GHQ日本地区語学校専門員。三十一年より三十三年エール大学極東語学科講師。現在、財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校長。

金田一春彦●大正二年東京に生る。昭和十二年東京大学文学部国文学科卒業。現在、上智大学外国語学部教授。著書『日本語』（岩波書店）、『新日本語論』（筑摩書房）、『日本語音韻の研究（東京堂）、『日本語の方言』（教育出版）など。

まえがき

我々が日常使いなれている言葉の中には、明瞭な意味内容・文法的機能をもつもののほかに、音・声・動作・状態・心理作用などを非意味的な音で描写するもの、いわゆる「擬音語・擬態語」がある。

擬音語・擬態語はどの言語にもあり、同じ鶏の鳴き声の描写でも各国語によっていささかちがうことは周知の通りである。日本語の場合、他の言語、例えば英語などと比べて、擬音語、特に擬態語がより多く使われるようである。日本語では「歩く」という動詞一つにいろいろの擬音語・擬態語をつけてちがった歩き方を表現するのに対し、英語では基本的な walk のほかに plod, strut, waddle, shuffle, swagger など異なる動詞を使って表現する。

また、「雨がしとしと降る」と「しょぼしょぼ降る」のちがいは、現実の雨の降り方にあるのではなく、見る者の心理のちがいにあるのであるから、日本語を母国語とするもの以外には理解が困難である。たとえ、説明によって理解は出来ても、感覚的につかむのは至難のわざであろう。

外国人に、彼らが擬音語・擬態語と感じるものを書き出させ、リストを作ってみると、我々が考えているものとはかなりの隔たりがある。漢字が後ろにある言葉でも、その漢字が未知のものである限り、それは擬音語・擬態語の中に入れられてしまう。「楽々」「続々」「黙々」「転々」などがそうである。かといって、中国人なら大丈夫かというと、発音も異なり、意味ももとのものから外れて日本語の中に定着してしまっている場合が多いので、容易にわかるとはいえない。例えば、「滾々（こんこん）」は我々は泉などの湧き出る様子に使うが、中国語では波の打ち寄せる姿だそうである。当用漢字以外となれば、我々日本人にも因って来たる意味は忘れられ、音だけのものになって行くであろう。

日本語を学習する外国人は、初歩の間は基本語の学習で手一杯であるが、少し進んで来ると、周囲の日本人が何か自分たちにはわからない畳語をたくさん使っているということに気づくのである。そして、日本人に説明を

求めても、なかなか満足な答えが得られない。擬音語・擬態語には地方差、年齢差があり、社会的なちがいもあり、また即興的にも作られる。したがって、これまで頼るべき辞典もなかったわけである。

「言語文化研究所附属東京日本語学校」は、日英両語の発想法の比較を研究するということで昭和四十八年から三年間、文化庁の日本語研究開発の研究費を得た。それで発想のちがいの比較という観点から擬音語・擬態語の研究を取り上げ、資料の収集と解説の作成を行った。この仕事を可能にして下さった文化庁の石田正一郎氏に厚くお礼を申し上げる。

採録した語は副詞を主とし、いわゆる擬音語・擬態語の分類に入るものであるが、必ずしも厳密に学問的な立場から選択したものではなく、敢えて一般的な感覚において、擬音語・擬態語的に使われているものにまで範囲を広げ、これらに便宜上、擬音語・擬態語の呼称を与えた。

したがって、語の意味内容の解説は現代人の常識として定着している範囲を分析して、定義づけを行ったものであり、例文もまたこれを基礎として、現行の実例を整理補充して作例を行った。実例をそのまま採用しなかった理由は、表現のうえの省略や飛躍が多く、理解のとどかない場合があることを考慮したからであるが、適切な例、出典を示すことに意義のある例などの場合はそのまま採用した。

時と共に移り変わるこれら擬音語・擬態語の姿を現時点でまとめてみるのも意義があるのではないかと考え、角川書店のお勧めに従って、「小辞典シリーズ」の中へ加えていただくことにした次第である。

金田一春彦先生の御高庇を得て、御多忙にもかかわらず貴重な解説をいただいた。心からの感謝を捧げる。基礎資料の収集をお手伝い下さった東京日本語学校の諸先生、主として原稿の作成整理に当たっていただいた阿刀田稔子先生、また、御協力下さった浅野百合子先生に感謝する。

昭和五十三年二月

浅野鶴子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

擬音語・擬態語概説

金田一春彦

一　擬音語とは
二　擬態語とは
三　擬音語・擬態語の特色
四　擬音語・擬態語の由来
五　擬音語・擬態語の形態
六　擬音語・擬態語の分布
七　擬音語・擬態語の音と意味との関連
八　擬音語・擬態語の文法
九　日本語と擬音語・擬態語

一　擬音語とは

乳色お月さま朝の月
仔山羊がめうめう乳飲みに

萌葱のお月さま一重暈
蛙がころころラムネ飲む

北原白秋の童謡「お月見」の、右の歌詞の。。じるしのところは、それぞれ仔山羊の鳴き声、蛙の鳴き声を写した言葉である。このような外界の音を写した言葉を**擬音語**と呼ぶ。

我々人間は、外界の音をまねしておもしろがるが、そういう音をまねすれば、それがすべて擬音語というわけではない。江戸家猫八さんとか、桜井長一郎さんとかいう人は、山羊の鳴きまね、蛙の鳴きまねから、コルクの栓を抜く音、録音器のリールが早く空回りする音までまねする。それは真に迫っていて、あの山羊の声のまねを聞いたら、ほんものの山羊もほんものと思うだろうと思われる。あれは擬音語ではない。なぜならば、あれは言葉ではないからだ。

言葉というものは、一定数の音単位の組み合わせで出来ている。蛙の声の擬音語「ころころ」は、ko

＋ro＋ko＋roだ。このkoは、他の単語「子供」や「小鳥」の「こ」と同じであり、roは、「白い」や「黒い」の「ろ」と同じ音である。それは仮名で書ける。これに対して、猫八さんの「山羊」の鳴きまねは、仮名で書ける音ではない。仮名で書けるような音では、いくら上手に組み合わせても、あんな山羊の声にそっくりな音は、出るはずはない。そういう意味で、あれは言葉ではないのだ。**音声模写**とでも云うべきものである。口笛とか、舌鼓とかいうものと同じ性質のもので、言わば遊びの一種だ。

人間は、口、鼻、のどを使って、言葉をしゃべることも出来れば、言葉でない、いろいろな音を出して遊ぶことも出来るのだ。

ところで、白秋の「お月見」には、次のような歌詞もある。

肉色お月さま望（もち）の月
啄木（きつつき）こつこつ印形（みとめ）彫る

これは啄木鳥が森の木の幹をつついている音を、印形を彫っているように聞いて、「こつこつ」と表現したものだ。啄木鳥の声ではない。単なる音だ。擬音語には、そのような単なる音を表したものもある。「擬音語」という言葉は、もともとこう云う言葉を表すにふさわしい。「めうめう」や「ころころ」は、これに比すれば、**擬声語**ということができる。

擬音語は、音声模写とちがって、言葉の一種であるから、言語によって表し方がちがう。例えば、英

語ならば、山羊の声の擬音語は、ブリート(bleet)という。蛙の声の擬音語は、クローク(croak)という。もし、音声模写ならば、日本人がやっても、アメリカ人がやっても、同じ動物の声を模写した場合、同じになって然るべきである。

二　擬態語とは

白秋の「お月見」には、また、次のような歌詞もある。

空色お月さま昼の月
蝶々がひらひら繭を出た
樺色お月さま十三夜
狐がきょろきょろ骨盗りに

ここの。。じるしのところは、形は以上述べた擬音語とそっくりであるが、性質がちがう。「ひらひら」は蝶が羽を動かして飛ぶ形容で、その時にhi ra hi raという音が出るわけではない。狐の「きょろきょろ」も、落ち着かずにあたりを見回す形容であって、kyo ro kyo roという音をたてるわけではない。つまり音をたてないものを、音によって象徴的に表す言葉で、これは**擬態語**と呼ぶ。

擬音語に、生物の声を表すものと、無生物の音を表すものとがあるように、擬態語にも、生物の動作容態を表すものと、無生物の状態を表すものとがある。「きょろきょろ」は、もっぱら生物の動作に用いられ、「ひらひら」は生物・無生物の両方がひるがえり飛ぶ様子を表す。これが、

星がきらきら輝く

砂がさらさら　こぼれた

のようなものなら、純粋に無生物の状態の表現だ。名前をつけるならば、無生物の状態を表すものの方は、正統の「擬態語」で、生物の状態を表すものは**擬容語**とでも言うべきものだ。

そうして、擬態語の中には、さらに進んで、人間の心の状態を表すようなものもある。

一人でくよくよ悩んでいた

さっきからいらいらしていた

の。。じるしのものがそれだ。こうなると、無生物には関係がなくなる。これは**擬情語**と言うべきものである。

擬音語が言語によってちがうくらいであるから、擬態語になると一層ちがう。同じ日本語の中でも方言で大きくちがい、知らない方言の擬態語は、何の形容かわからないこともある。

長谷川二葉亭は、名古屋の方言であろうか、よく働く人のことを、

襷(たすき)がけで、クレ〳〵働く人

と言っている。同じ愛知県で知多半島へ行くと、したたかに相手を殴りつけることを、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほんのり打つ

というが、これでは軽く打った意味に誤解されそうだ。

右の擬音語・擬態語・擬情語三つの中で、擬音語は、どこの言語にもあるようである。サピアは、アメリカーインディアンのうちのアサバスカ語には擬音語がないと言ったが、これはよほど珍しい言語である。擬態語になると、これを欠く言語もかなりあるようで、フランス語は擬態語がないと聞く。擬情語になると、さらに少ないはずで、日本語にある擬情語は、ヨーロッパ人が不思議がり、興味をもつ。

三　擬音語・擬態語の特色

擬音語・擬態語は、言語の中で幾つかの特殊な性格をもつ。

第一に、言語には一般にソシュールの言ったように、その音と意味とが非必然的な性格がある。われわれは「山」をヤマ、「川」をカワというが、山のもっている内容と、yama という音との間には、何ら関連がない。「川」の内容と kawa という音の間にも、何ら関連がない。何ということなく、そういう結び付きが出来て、それを利用しているというだけのものである。

が、擬音語・擬態語には、必然的と言えないまでも、ある程度合理的な結び付きがある。ソシュールはそういう点からみて、擬音語・擬態語と感動詞との類は、言語の中で特別のものとしている。

この、意味と音との間の合理性は、擬音語において、ことに著しい。だから国語がちがっても、同じ

音はしばしば似た音の組み合わせで表現される。例えば、鶏の鳴き声は、日本語では、コケコッコーであるが、英語では cocka-doodle-doo　ドイツ語では kikeriki　フランス語では coquelico　中国語では、ククミー（ククミーのクは口偏に「古」の字を、ミは口偏に「米」の字を書くそうだ）、朝鮮語では、コッキョーという。擬態語では、このように国語を超えて類似することは期待できないが、しかし、音の性質のちがいから、母音のうち、i は明るいもの、小さいもの、時間的に短いもの、距離的に近いものを表し、a　o　u などはそれに反する傾向があることを、イエスペルセンなどは述べている。

第二に、ことに擬音語は、外の音に少しでも近い音を求めるところから、ほかの単語には用いられないような特別の音を、用いることもないではない。例えば、日本語では、風の音を表す擬音語、

ピューピュー

のピュの音は、ピューリタンのような、外来語でなければ用いられない音である。

萩原朔太郎の「鶴」という詩には、鶴の声として、

とをてくう　　とをるもう　　とをるもう

と、あるが、この「を」で表される音は wo と読ませるのであろうか。

こういうことも感動詞に似た点で、感動詞には、舌打ちの、

チェッ

というものがあったりする。先年、驚きを表す感動詞として、

シェー

と、いうようなものがあったことも記憶している人が多かろう。

第三に、これは第一の音と意味との関係が、比較的合理的に結ばれているところから、新しい音の組み合わせでも意味が理解されやすく、そのために、新作がどんどん許されるという性質をもつ。萩原朔太郎の「とをてくう」もその例と見られるが、朔太郎の他に、北原白秋・草野心平・宮沢賢治といった人たちの作品には新作の擬音語・擬態語の例が多い。荻原井泉水は、『初夏の奈良』という作品の中に、孟宗竹の枝葉が、築地の瓦の上に軽く豊かにかぶさっているのを、

わっさり

という言葉で表現したが、彼によると、この擬態語は非常に苦心して作った単語で、他の人が無断でこの言葉を使用していることを憤慨にたえないと言っていた。

近頃では、漫画や劇画やドタバタテレビ劇に、刺激的な新しい擬音語が盛んに登場することが、一部の人を慨嘆させていること、広く知られるとおりである。

四　擬音語・擬態語の由来

擬音語・擬態語には、もともと固有の日本語、すなわち和語のものと、中国から渡来した漢語のものとがある。その他に欧米から渡来した洋語もあり、擬音語には時計の音

チクタク

があり、擬態語には電光形に曲がって進むことを、

ジグザグ

としたのはその例であるが、類例は少ない。この辞書では、和語のものをもっぱら取り扱うので、漢語の擬音語・擬態語についてふれておきたい。

漢語のものはその形から見て、次のようになる。

一　漢字一字のもの

燦（サン）（として）　寂（セキ）（として）　恬（テン）（として）　杳（ヨウ）（として）

二　漢字二字のもの

(1)「―焉」の形のもの

溘焉（コウエン）　忽焉（コツエン）

(2)「―乎」の形のもの

確乎（カッコ）　断乎（ダンコ）

(3)「―爾」の形のもの

莞爾（カンジ）（として）　卓爾（タクジ）　卒爾（ソツジ）　渺爾（ビョウジ）（たる）

(4)「―若」の形のもの

自若（ジジャク）（たり）　瞠若（ドウジャク）（たらしめる）

(5)「―如」の形のもの

突如（トツジョ）　躍如（ヤクジョ）

(6) 「―然」のもの

宛然（エンゼン）　婉然（エンゼン）　画然（カクゼン）　愕然（ガクゼン）　敢然（カンゼン）　欣然（キンゼン）　決然（ケツゼン）　公然（コウゼン）　昂然（コウゼン）　傲然（ゴウゼン）　渾然（コンゼン）

燦然（サンゼン）　釈然（シャクゼン）　粛然（シュクゼン）　悄然（ショウゼン）　騒然（ソウゼン）

(7) 同じ語根を重ねたもの

藹々（アイアイ）　唯々（イイ）　営々（エイエイ）　奄々（エンエン）　延々（エンエン）　炎々（エンエン）　快々（オウオウ）　呵々（カカ）　峨々（ガガ）　赫々（カクカク）　嬉々（キキ）

汲々（キュウキュウ）　炯々（ケイケイ）　呱々（ココ）　煌々（コウコウ）　匆々（ソウソウ）　涼々（ソウソウ）

(8) 同じ子音の拍を重ねたもの

佶屈（キツクツ）　恍惚（コウコツ）　颯爽（サツソウ）　忸怩（ジクジ）　瀟洒（ショウシャ）　参差（シンシ）　悽愴（セイソウ）　倉卒（ソウソツ）

(9) 同じ韻をもつ拍を重ねたもの

婀娜（アダ）　靉靆（アイタイ）　安閑（アンカン）　蜿蜒（エンエン）　宛転（エンテン）　混沌（コントン）　索漠（サクバク）　蹉跎（サダ）　惨憺（サンタン）　燦爛（サンラン）　蕭条（ショウジョウ）

従容（ショウヨウ）　嬋娟（センケン）　蹌踉（ソウロウ）

(10) 漢字三字のもの

鞠躬如（キツキュウジョ）　欣々然（キンキンゼン）　洋々乎（ヨウヨウコ）

(11) 漢字四字のもの

唯々諾々（イイダクダク）　意気揚々（イキヨウヨウ）　侃々諤々（カンカンガクガク）　虎視眈々（コシタンタン）　小心翼々（ショウシンヨクヨク）　正々堂々（セイセイドウドウ）　戦々兢々（センセンキョウキョウ）

八面玲瓏（ハチメンレイロウ）　優々閑々（ユウユウカンカン）

以上(1)—(11)のものは日本語の中に入ると、

堂々と（振る舞う）　堂々たる（態度）

のように用いられ、文語では「堂々たり」「堂々たれ」「堂々たれば」「堂々たらん」のようにも用いられる。これは学校文法では「タルト型の形容動詞」と呼ばれる。そうして「堂々と」は連用形、「堂々たる」はその連体形とされる。ここに、「形容動詞」という言い方は元来まずいので、一種の「形容詞」と見てよかろう。中には、「—たる」の形がなくて、いつも「と」しかつかないものがあるが、これは活用の不完全な形容詞ということになる。

五　擬音語・擬態語の形態

和語の擬音語・擬態語は次のような形をもつ。

(1)　一拍語のもの

ふ(と)　つ(と)

(2)　一拍の語根+「い」「ん」「っ」引く音のもの

ぷい(と)　ぽん(と)　わん　かっ(と)　さっ(と)　ちょっ(と)

じっ(と)　きやっ　もう　にゃあ　ちゅう　ぴい

(3)　二拍の語根のもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com